

《論 文》

話しことばに見られる外来語について

立 川 和 美

Loanword in Modern Japanese Discourse

KAZUMI TACHIKAWA

キーワード

話しことば (Discourse), 外来語 (Loanword), 談話分析 (Discourse Analysis)

1. はじめに

カタカナ語としての外来語は、16世紀以降、英語からの借用を中心に増加してきたが、『広辞苑第5版』(1998)での割合は10.2%と、日本語の中では現在でも周辺性・特殊性が強いという傾向が見られる^(注1)。本稿は、こうした外来語の話しことばでの使用に着目し、その記述と整理を行う。

さて、外来語には、「漢語が含まれる」(『国語学大辞典』『日本語学研究事典』等)とする立場と、「室町以降に入ってきた西洋語を指す」(『日本国語大辞典』)とする立場がある。また、外来語と外国語との区別について、楳垣(1963)は、発音や意義、用法の変化の有無、年代の古さ、使用頻度と範囲、表記の際の文字の種類等を基準とし、石綿(2001)では、「まだ完全に日本語化していない段階」を外国語と呼ぶのに対して、外来語は「臨時使用の感覚がとれ」、「日本語の単語としての性質をすでにもってきているもの」とする。

これらをふまえ、本稿では、外来語とは、日本語化された外国語の中の、西洋由来のカタカナ表記される語句で、漢語は含まないものとし

て分析を進めていきたい。これは、外国語との区別の判断基準は、実際にその語を使用する状況や使用者の個人的背景によって様々となることから、できるだけ広い範囲を認める立場をとるためである。

2. 近年の外来語に関する先行研究

従来の外来語研究は、量的な分析が圧倒的であり、質的には、語彙の変遷や限定されたジャンルにおけるありようが探られていた。更に、談話に比べて文章に関する研究が多いという特徴が見られる。ここでは、こうした先行研究の代表例を見ておきたい。

まず、国立国語研究所では、雑誌や新聞、高等学校教科書の計量的実態調査、世論調査や定着度調査が行われている。そして近年の「外来語に関する意識調査」(2003)では、世代間における容認率の開きや、「相手によって話しが通じにくくなる」ことや、「誤解や意味のとりちがえの発生」といった外来語使用をめぐる問題が指摘されている。

談話に特化した調査としては、「日本人の知識階級における話し言葉の実態」(野元菊雄代表 1980)や、男女の職場での談話を調査した

現代日本語研究会（1997, 2002）などがある。

文章・文体の研究としては、西洋語による文体への影響を考えた森岡（1991）や欧文脈成立の過程を探った木坂（1988）のほか、特定の作家や文学作品、マスコミや広告の外来語調査、行政外来語に関する陣内（2000）や、外国語教育への応用を目的としたカッケンブッシュ・大曾（1990）、更に最近の総合的研究として、石綿（2001）などがある^(注2)。

さて、以下では、話し言葉の外来語の性格を明確化するための比較の対象として、特に書きことばの特性に関する指摘をとりあげていきたい。

雑誌の文章をとりあげた国立国語研究所（1953）では、美容や服飾、料理といった限定されたジャンルにおける外来語の多用と、用いられる外来語の出自と文章内容との関係（医学＝ドイツ語等）が報告されている。同様に雑誌の文章を分析した国立国語研究所（1962-1964）は、のべ語数約40000語のうち2.9%、異なり語数約30000語のうち9.8%が外来語であるが、それぞれの語の複数回にわたる使用率が低いという結果を出している。

また石井（1989）は、「天声人語」22編（のべ語数4347語、異なり語数2327語）の造語成分を調査し、造語成分のうち外来語は約4%にとどまり、特に単純語が多いとしている。

松岡（1982）は、『当世書生气質』という文学テキストをとりあげ、その地の文と会話文とを比較しているが、前者での外来語が「日常生活で長年使い慣れたものの名前に限られている」のに対し、後者では書生特有の「隠語的性格」を持つ、「社会的地位」顕示のために多用される外来語のありようを指摘している。

このほか、現代語の文章の外来語について、国立国語研究所「外来語委員会設立趣意書」では、読み手の分かりやすさよりも、書き手の使いやすさがしばしば優先されるとするほか、近年、特に広告の文章での外来語の多用・乱用が目立つとしている。

3. 話しことばにおける外来語の使われ方について

3. 1. データの特性

本稿で扱うデータについては、状況や談話参加者の属性が多様となるように、ラジオのトーク番組、現代日本語研究会編（2002）による職場の雑談、自由雑談の3種類をとりあげた^(注3)。ラジオ番組は、全て複数の出演者による会話中心のプログラムで、インフォーマルな形式で展開されている。また職場での談話は、参加者の性質や会話の内容は様々で、かつ1つの場面カテゴリーの中でも、電話や雑談、接客など多様な内容が収められている。自由雑談は、女性のみと男女混合という2種類のデータを対象とした。

3. 2. 分析結果：特性ごとに見る外来語の使用例

本稿では、外来語が用いられる際の情報の成立状況をふまえ、書きことばの特徴との比較を適宜入れながら、具体例をもとにその性質を明らかにしていきたい。

3. 2. 1. 他の語では言い換えられないという外来語の特性による使用例

話しことばに登場する外来語の大部分は、談話参加者がよくその意味を理解しているもので、その事物等が日本に入ってきたときから用いられ、時代の変化の中で生き残った語である。更に、漢語はその多くが和語へ言い換えられる一方、外来語は言い換えられない場合が多いという特徴とも関係し、次のような例が挙げられる。

(例1：D)^(注4)

A：先程から結構な賑わいでございます。

B：あー。そうですね。おかげさまでたくさんの方に参加していただいてよかったです。

A：あいにく雨が降ってきちゃいましたけど。

B：ちょっと残念ですけど。

A：えー荒川区と北区とで。こちら連動してウォークラリーを、コースはどういったコースがあるんですか。

3. 2. 2. 話しことばが音声言語であるという特性による使用例

前述の容認率が高い外来語が多く、語の基本性が重視されていることは、書きことばとも並行する性質だが、これは音声による話しことばは、相手との即時的なやりとりを原則とするため、「時間がなく忙しい」という制約の下に成立しているがゆえの現象ともいえる。つまり、相手とのやりとりが直接的である談話では時間がかかる表現や言い回しは避けられる傾向があるのである。更に、音や響きといった音声要素が受信者に与える効果は、書きことばには見られない性質である。

(例2：C)

A：でも、ラジオっていうのはね、でも、ちょっとそこから離れてだいたいご行ったりなんかしても。

B：うん。

A：聞いているんだよ。

C：うーん。

B：そうねー。

A：テレビはね、だいたい立っちゃうと、もう見えない。

B：あー、もう何もあの一、ノータッチになっちゃうからね。

A：そのへんがちょっと違うんだな。おれは、あー、違うと思う。

B：はい。

A：で。ずーっとテレビをつけっぱなしにしてる人もいるんだよ。

B：あー。

C：いますねえ。

A：見てもいないのに。あれも、でも視聴率にはいるんですね。

「ラジオ」や「テレビ」は、それらが社会に入ってきたときから使われ続けている和語や漢語には代替不能な容認率100%の外来語であるといえよう。また「ノータッチ」については、「ノー」という否定辞が冒頭に来る強い響きが、うまく使われている。すなわち「見えなくなる」という日本語の表現よりも、「全く関わりを持たない」という強い意味合いが明確に伝わってくるのである。

3. 2. 3. 話しことばにおける「場」と関わる使用例

3. 2. 3. 1. 日本語に馴染んでいない外来語を多用し、受信者との仲間意識を示す。

その談話が持つ洗練された雰囲気などを、外来語によって強調することで、話し手と受け手、更に受け手同士の仲間意識やつながりの強さをアピールする、受け手への配慮が強く表れたケースである。これはラジオ番組など、受け手が空間的に広がりを持ちながらも、具体的な特定の性格を持つ集団である場合に多用され、そういった意味では若者言葉などとも似通った性格を持つ用法と言える。

また、発信者はこの場合、受信者がその外来語を理解していることを強く意識しながら、その「場」に支配された語の選択を行っているが、これは書きことばにも認められる現象である。但し、書きことばでは、こうした特性を意図した外来語の出現に関して、ジャンル間で差異が見られるのに対して、話しことばではジャンルを問わず広く認められるという点で、異なるものといえる。

(例3)の「トラップ」は、一般的に容認率の低い外来語だといえるが、受け手(ラジオの聞き手)はこの語を知っているという前提で用いられており、この語が積極的に談話の「場」を形成する役割を果たしている。

(例3：A)

A：ただね、女性もねー、その女性もまた気付けていうので、その、難しいトラップを

仕掛けてくるときもあるわけですよ。

B：はい。

3. 2. 3. 2. 用いられている外来語が、当該の文脈のみに有効な意味を持つ。

①外来語に込めた特有の意味がその前後で説明されることで、内容展開が円滑になる。

辞書的な意味にとどまらず、その談話においてのみ発生する特別な意味といった、極めて強い現場性を持った外来語の用法である。これは、当該の文脈において、用いられた外来語の意味の拡大や限定、縮小が発生する場合と捉えることもできる。

前述のように、外来語がそれに関する受信者の知識の有無を無視して用いられるというケースは少ないが、受信者が文脈を通じて外来語の意味を理解し、想像していくというケースもある。この場合、発信者と受信者との間に「教える＝教えられる」という構図が出来上がるわけだが、この結果、両者は共に「場」とどう関わるかを意識しながら談話展開に関与していくことになる。これは、発信者が受信者の立場や属性、意識などを、具体的にかつ鮮明に理解できるという話しことばの特徴と連動している現象だといえよう。

(例4：C)

A：みんな牽制しあうんですよ。この人たばこ吸ってんのかなーと思って。

B/C：ふんふん。

A：ところがある人間が、いいですかってたばこ取り出した時に、ものすごい共有するんですよ。これ。はい。あれーっ吸うんですかーって。みんな、こうたばこを出して、吸い出して、ライターつけあって、いやいやいいもんですなーって。これは今、文化放送でも、今、喫煙所ありますよね。あそこに集まってくる人間ってほんとに数少ないんですよ。(中略)

B：もう包囲されちゃってる人間の、もうお前は逃げられない。

A：そうそうほんとにそう。ところが、そういうマイノリティになってから。

B：うん。

A：マイノリティの気持ち、よおく分かるんですよね。

B：ほほーん。

ここでは「マイノリティ」という外来語を用いる前に、その実情が予め説明されているため、「少数派」という漢語の意味に加えて、その集団が持つ「連帯感」や「虐げられている現実」、「遠慮がちな行動スタイル」など、様々なニュアンスが表されている。一方漢語では、単に「少ない」という数量的な面が強調され、聞き手の印象に残ってしまうという弊害が否めない。また、こうした説明は、これから用いる外来語を予告するものであり、その内容をまとめる端的な語として「マイノリティ」が出てくるのだが、このような流れは、話し手の、時間に支配される談話における表現を短くまとめたという時間節約の意識や、テンポ良く円滑に談話の流れを展開していきたいという意識に基づいたものと見ることができ。

②和語・漢語・外来語を併用することで、主張内容や意味を明確にする。

①のように外来語にこめた意味を文脈内で説明するわけではないが、漢語や和語での表現を外来語に言い換えることによって、文脈のみに有効な特定の意味を強調したいという意図を明確に示す。

(例5：A)

A：彼は変わらないの。

B：あー、はあはあ。

A：変わらないの。

B：彼を、じゃあ、彼自体を(コホコホ)変えるしかない。

A：変えるしかない。彼の性格をチェンジすることは無理なの。彼そのものをチェンジするしかない。

B：あー。

ここでは、「変わる」、「変われる」、「チェンジする」という表現が出現している。「性格をチェンジする」という言い回しは、日本語としては違和感があるが、これによって意味が強調される効果が期待される。また「変わる」という和語は多義であるが、「チェンジ」という外来語によって内容の注目度を上げ、意味を限定することができる。更に、同じ表現の繰り返しを避けることによって、おしゃれな若者に向けた会話というイメージを演出する効果も発生している。

3. 2. 3. 3. 談話内容や場面に応じて、外来語出現の様相が変化する。

例えば、職場での会議や電話での打ち合わせなどには、その場を設定するための現場性の高い外来語が頻出する。その多くは専門的で、職場の談話を成立させる重要な要素として談話構成に寄与している。こうした場面や内容に応じた使い分けは、書きことばでは、広告での外来語の多用などに認められるが、こちらはレトリックや文体的効果を意図しているのに対し、話しことばでは「場の設定」と深くつながっている点で、性格は異なる。

3. 2. 3. 4. その文脈のみ使用される外来語（多くは混種語）を造語する。

発話者は、それを使用しないと話がうまくつながらない、またはそれをを用いることで内容展開を操作しようといった考えの下、語を選択しているのだが、こうした場合に、その文脈のみで有効な「臨時一語」^(注5)が頻用され、その場合の語種は、「混種語」であることが多い。先行研究では、文章の外来語では、単純語としての出現が中心だとされていたが、今回の談話では反対の結果が見られた。データには様々な臨時一語である混種語（例：ミスター年金・お疲れメール・課長チェック・オーナーさん）が観察され、こうした表現は談話において積極的に

用いられていることが分かる^(注6)。

(例6：F)

A：いわゆる、ねー、チェーン特典で、別絵柄、運用できるぐらいの一、アナザーフォトがあるんだったらー。

「チェーン特典」については、「特典」は広く理解可能な漢語で、この文脈に特有の「チェーン」という外来語の理解がこの漢語との結びつきによって助けられている。臨時一語は、新聞などの文章（テキスト）でその研究が進められているが、言いかえがきかない、内容を説明すると長くなってしまうものをまとめあげる略語的性格から、時間性に支配される話しことばにおいても必須の用法と認められる。「アナザーフォト」も、この談話でのみ用いられる特殊な専門性の高い外来語であるといえる。

3. 2. 4. 比喩表現と外来語が共起する使用例

比喩的に内容が展開している、外来語自体が比喩となっている、擬態語と共起するなど様々なパターンが見られるが、表現や談話内容に面白みを出したり、端的な表現を可能にしたりする効果が認められる。これは書きことばにも認められる修辭的用法である。

(例7：E)

A：どっちタイプですか。こう、役に入り込んで、もお、それこそすごい、スタジオに入った時からずっとなりきってるような人もいるじゃないですか。

B：うん。

A：それと逆に、その、緩急のすごい人もいるじゃないですか。

B：うん。

A：あれ、あんなシリアスな役なのに、意外と普通の時は普通にしてんだなって。

B：うん。

A：いるじゃないですか。

B：ほく、ませこぜですね。

- C : (うふふ)
 B : その日の気分次第って感じですね。
 C : はあ。
 A : えー。
 B : うん。
 A : えっ, それはー。
 B : 上着と一緒に, その, その日の気分次第
 て感じですよ。うん。
 A : そ, そうですか。なんとなく, 今日^はは役
 ずっと入り込んでたいみたいな。
 B : うーん, 時もあるし。
 A : あ。
 B : ばらばらなときもあるし。うーん。
 A : この時はかなりラフな上着を着てる時で。
 B : うーん。

ここでは、俳優のドラマでの「役作り」というテーマを分かりやすく説明するための「上着」という比喩において、「ラフ」という外来語が使用されている。「ラフ」は、一般的に服装や雰囲気と共に起して「形式にこだわらない、大まかで自由な」という意味を持つが、それがここでの「役作り」という話題とうまく共鳴しあい、端的な表現として効果的に用いられている。

4. まとめ

以上、話しことばの外来語の様相を観察してきたが、まず、内容に応じた使い分けや当該談話に特有な意味合いの付加、臨時一語など、一回性の「場」に支配される用例が見られた。また仲間意識など、受け手との距離感を操作する効果も認められた。これらは、話し手による、談話全体に特定の方向性や雰囲気を与えようという意図と関わるものと考えられる。また、文章と異なり、談話では、受信者への配慮が優先される傾向が強いことも明らかになった。

このように発信者と受信者が話しことばの「場」を意識することで、外来語の使用による様々な用法・効果が発生していると考えられ

る。

今後は、音声言語である談話に特有の性質である可変性や、展開が複数の談話構成員の手に委ねられているといった文章とは異なる点などに着目し、擬声語や擬態語、漢語との関係なども含めて、話しことばの外来語に関する分析を進めていきたい。

注

- (注1) 但し、日本語は、構造上は柔軟に外国語を受け入れやすい言語と考えられる。
 (注2) 鈴木(2000)では、日本語における2000年までの外来語研究がまとめられている。
 (注3) ラジオ番組の収録は2007年9月で、(A)「福山雅治スズキトークFM」(FM東京)、(B)「東京コンシェルジュ」(J-WAVE)、(C)「親父パッション」(文化放送)、(D)「永六輔の土曜ワイド」(TBSラジオ)、(E)「伊集院光日曜日の秘密基地」(TBSラジオ)の5本で、発話者はA・Bが男女30~40代、C~Eが男女30~60代、視聴者は、Aが女性20~40代、Bが男女20~50代、C~Eが男女40代~と想定される。
 男性の職場の談話(F)では、資料の協力者(中心的発話者)は10人の男性(20~50代)で、朝・休・会議、各々10種類(計30本)の場面である。
 雑談データは、(G)女性4人(40代)の喫茶店での自由会話と、(H)男性2人(50代、40代)女性1人(30代)の「若者言葉」に関する雑談である。
 (注4) 文字化では、重なりや発話のとき等は明記していない。また、各例文の冒頭のローマ字は(注3)に示したデータの種類を示す。
 (注5) 石井(1993)では、当該テキストもしくはそれに関連する一連の内容においてのみ有効な書き手による造語とされている。
 (注6) 例えば、「ミスター年金」など政治的な場面で用いられる表現は、何度もマスコミに出現することで臨時一語の性格は薄れ、広く用いられるようになる予想される。また職場の会議では、独特の長い混種語(例:エンジン組立課中型係)が多用されている。

参考文献一覧

- 石井正彦(1989)『語構成』『講座日本語と日本語教育』6 日本語の語彙・意味(上) 明治書院
 石井正彦(1993)『臨時一語と文章の凝縮』『国語学』173 国語学会
 石綿敏雄(2001)『外来語の総合的研究』東京堂出版
 榎垣 実(1963)『日本外来語の研究』研究社

- カッケンブッシュ寛子・大曾美恵子（1990）『外来語の形成とその教育』（日本語教育指導参考書16）国立国語研究所
- 木坂 基（1988）『近代文章成立の諸相』和泉書院
- 現代日本語研究会編（1997）『女性のことば 職場編』ひつじ書房
- 現代日本語研究会編（2002）『男性のことば 職場編』ひつじ書房
- 国立国語研究所（1953）『婦人雑誌の用語—現代語の語彙調査』秀英出版
- 国立国語研究所（1962-64）『現代雑誌90種の用語用字 1-3』秀英出版
- 陣内正敬（2000）『『役所言葉』の改善マニュアルと『役所カタカナ語』』『日本語学』19(2) 明治書院
- 鈴木俊二（2000）『日本語の外来語の研究動向—研究方法と文献目録』『国際短期大学紀要』15号
- 松岡洸司（1982）『外来語の歴史』『講座日本語学4 語彙史』明治書院
- 森岡健二（1991）『近代語の成立 文体編』明治書院